

これは Google に保存されている <http://www.fbs.osaka-u.ac.jp/labs/skondo/saibokogaku/great%20fishing.html> のキャッシュです。このページは 2015年7月8日 06:36:40 GMT に取得されたものです。

そのため、このページの最新版でない場合があります。詳細

フルバージョン テキストのみのバージョン ソースを表示

ヒント: このページで検索キーワードをすばやく見つけるには、**Ctrl+F** または **⌘F** (Mac) を押して検索バーを使用します。

こんどうしげるの 生命科学の 明日はどっちだ!?



目次

連載にあたって

近藤研の研究

Who am I ?

番外編

「原発事故でチョウに異常」という論文は、壮大な「釣り」ではないのか？

ここ数日、琉球大の大瀧丈二氏が最近scientific report誌に出した「原発事故がヤマトシジミの突然変異を誘発した」という内容の論文に関して、主にweb上で議論が盛り上がっている。

発端は、大瀧氏の論文が共同通信、時事通信で取り上げられ、一般に報道された事である。

<http://www.kyodonews.jp/feature/news05/2012/08/post-6443.html>

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20120810-00000172-jij-soci>

論文内容を簡単に解説すると以下ようになる。

(既に詳しく解説するサイトも多数立ちあがっているので、詳細はそちらをお読みください)

「大瀧氏らのグループは福島を含む東日本の各地で、事故後の5月からヤマトシジミを採取、非常に多くの個体が形態と翅の模様に変異を持っていることを発見。さらに子の世代でより高頻度の変異が起きることを確認。また、人工的に放射能を当てた場合でも同様の変異が起きることを確認。これ等の事実から、原発事故の影響が野生の昆虫に出ている、とした。」

<http://www.nature.com/srep/2012/120809/srep00570/full/srep00570.html>

このタイムリーな記事は、反原発の人たちの間に広まり、さらにマスコミ方面でも拡散をしているようで、ついにはBBCでも取り上げられたらしい。

<http://www.bbc.co.uk/news/science-environment-19245818>

この時期に、この内容の論文が報道されれば、即座に広まるのは容易に想像がつく。

その一方で、一般マスコミの報道後に、研究を批判するサイトが複数立ちあがっている。

批判の主な理由は以下のとおりである。

「ヤマトシジミは、現在棲息範囲が北上しつつある種であり、その北限（東北地方）においては、非常に高い頻度で形態や翅の模様に変異がみられる。したがって、このような放射線の影響を測定するには、全くふさわしくない。なんで、わざわざヤマトシジミを使ったのか？しかも、通常時でも変異が出ることを報告しているのも大瀧氏自身である。サンプルの数が異常に少ないことから、結果ありきのずさんな報告ではないか？」

<http://d.hatena.ne.jp/horikawad/20120813/1344814974>

<http://togetter.com/li/353759>

おそらく誰が読んでも、批判の方に分があると思うはずだ。そもそも、通常時でも変異がたくさん出る種類を、このような調査に使うのはナンセンスである。これぐらいは中学生でもわかるだろう。だから、おそらく、今後

は批判的な意見が主流を占めていき、この「事件」もゆっくと収束していく事になると予想する。

だが、不思議に思うのは、なぜ著者らは、このようなく突っ込まれるに決まっている>大穴の空いた論文を出したのか？ということである。

世間の注目を浴びることが確実で、しかも大穴の空いた論文であれば、批判の集中砲火を浴びることは、容易に想像がつく。批判の方に分があることが、研究者の間で広まり記憶されれば、今後の論文掲載、研究費の取得に、致命的な影響を与えるはずだ。研究者であれば、それを予測できないはずがない。それをあえてやるからには、何か隠し玉を持っているか、あるいは、全く別の意図があるのではないだろうか？？？

穴だらけの論文を書く意味は？？と考えているうちに、昔、似たような事件があったことを思い出した。有名なソーカル事件である。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%82%AB%E3%83%AB%E4%BA%8B%E4%BB%B6>

「ソーカル事件とは、ニューヨーク大学物理学教授だった**アラン・ソーカル**が起こした事件。数学・科学用語を権威付けとしてでたらめに使用した人文評論家を批判するために、同じように、科学用語と数式をちりばめた無意味な内容の疑似哲学論文を作成し、これを著名な評論誌に送ったところ、雑誌の編集者のチェックを経て掲載されたできごとを指す。掲載と同時にでたらめな疑似論文であったことを発表し、フランス現代思想系の人文批評への批判の一翼となった。」(wikipedia)

もしかすると、大瀧氏はソーカル事件の再現を狙って、マスコミや生命科学者を釣り上げたのではないだろうか？

考えてみれば、今回の「事件」は、科学と報道の在り方に対して、大きな問題点を提示する。

まずマスコミ自身が「報道する内容に対して全く理解していない」事を暴露することになる。

そんなことは、研究者の間では常識だが、一般人はそう思っていない。筆者（近藤）自身もかつて新聞の科学部（毎日新聞）の方と話して驚いたのだが、科学部は極めてマイナーな部署で、部員が6人しかおらず、しかも半分以上が文系であり、もちろん博士号を持っている人などいなかった。**論文を自力で読む能力もなければ、批判する能力も期待できないのである。**そんな集団が、社会的に極めて影響力のある記事を書いているのである。今回の事件は、極めて社会的に重要な件に対して、<説明されれば中学生でもおかしいと解る>内容の論文が、一般マスコミに報道されてしまった訳だ。マスコミの科学に対する理解力が皆無に近い事を知らしめるのには、理想的な例であると言わざるを得まい。

次に、この**インターネット社会における科学的な意識の健全性**が、どの程度のものであるかを、記事の広がり、それを批判する意見の追いかけて、と言う形で**確認することができる**。これも結構興味深い。本来であれば、頻りにマスコミに出ている著名学者（自称学者を含む）の人たち、例えば、脳科学のもじゃもじゃ君などが、即座に反応して、はっきり否定するなどの行動を取ってくれば良いのだが、どうもああいう人たちは、そういう役には立たないようだ、なんて事が解ってしまう。そもそも、健全な（と自分で思っている）科学者が、よってたかって批判しても、この手の記事の拡散を止められない（あるいは止める努力をまじめにしない）ということが解れば、それはそれで科学者本人達（もちろん筆者を含む）に突き付けられた、大問題である。さらに、**科学界の抱えている問題点**も浮き彫りになる。本来、科学は「客観的に判断できるはず」なので、論文が査読を経て専門誌に掲載されるということは、形式的には、「正しいと認定された」と言う事になる。もちろん、これは理想である。著者・査読者による勘違い等はいくらでもあるから、（捏造を除いても）間違い論文が多数あるのは当然であるが、「そうあるべき」という点に関しては、皆同意見だろう。しかし、最近増えてきた新しいスタイルの雑誌、今回の論文の掲載誌であるscientific reportなどは、「実験手技などに問題がなければ基本的に掲載。評価は出版された後でやってくれ」というスタンスである。このスタイル自体に関しては、特に問題があるわけではない。（現在の査読のやり方も大きな矛盾を抱えている）ただ、「**評価がなされていない論文が出版される**」という事実を、マスコミを含む一般社会が、正しく知らないと、非常に危険な事が起きる可能性があるだろう。

上記のように、この事件が大きくなれば、科学に対するいろいろな社会的事象が浮き彫りになり、それぞれが極めて興味深く、かつ重要なのである。もしかすると大瀧氏は社会科学者に転向するつもりなのかもしれない。

で、「あれは科学者生命を賭した釣りでした」という続報を、文芸春秋あたりを狙ってせっせと書いているのではないだろうか。もし本当にそうだとしたら、「参りました」と頭を下げるしかないかなあ。

どうでしょう？

この推理、あたってますか？

